

文部科学省博士課程教育リーディングプログラム

# 筑波大学グローバル教育院 エンパワーメント情報学プログラム

## 外部評価（平成 28 年度実施）

### 評価結果の概要



平成 28 年 12 月

# 目 次

## 1. 外部評価の実施にあたって

- (1) 外部評価の目的
- (2) 平成 28 年度外部評価の経緯

## 2. プログラム全体の総合評価

- (1) 評価
- (2) 課題

## 3. 評価項目ごとの意見等

- (1) リーダーを養成する学位プログラムの確立
- (2) 産学官民参画による修了者のグローバルリーダーとしての成長及び活躍の実現性
- (3) グローバルに活躍するリーダーを養成する指導体制の整備
- (4) 優秀な学生の獲得
- (5) 世界に通用する確かな学位の質保証システム
- (6) 事業の定着・発展

## I. 外部評価の実施にあたって

### (1) 外部評価の目的

エンパワーメント情報学プログラムは、多様な文化的背景を有する人々が集まる国際社会において、イニシアティブを発揮し、人をエンパワーするシステムをデザインできるグローバル人材を養成する、5年一貫の博士課程学位プログラムである。平成25年度、文部科学省博士課程教育リーディングプログラムに採択された。

本プログラムが外部評価を実施する目的は、プログラムによる自己点検評価の実施後、外部の有識者による検証を行うことで、プログラムの活動の現状と課題を明らかにし、教育の質の向上を図ることにある。

### (2) 外部評価の経緯

博士課程教育リーディングプログラムに採択されたプログラムは、採択後4年目に中間評価、7年目に事後評価を受けることになっている。評価は、博士課程教育リーディングプログラム委員会の部会長会議及び類型別審査・評価部会において実施される。

本プログラムは、平成28年度に中間評価を受けるにあたり、平成27年度及び平成28年度の外部評価は、中間評価に際して日本学術振興会に提出する中間評価調書に沿って項目を設定し、実施することとした。

実施体制は、「エンパワーメント情報学プログラム外部評価実施要項」（平成27年5月22日、エンパワーメント情報学プログラム運営委員会決定）に基づき、平成27年7月より、産業界、学界の有識者5名を外部評価委員として委嘱した。

第1回外部評価委員会を、平成27年11月25日（水）に筑波大学において開催した。第2回外部評価委員会は、平成28年8月5日（金）に開催し、外部評価委員5名の内、原島博委員、岩野和生委員、土井美和子委員、萩田紀博委員の4名にて評価を行った。

第2回外部評価委員会開催後、各委員による外部評価シートの記載内容をまとめ報告書を作成した。本稿は、報告書の概要を記載したものである。

## Ⅱ. プログラム全体の総合評価

### 【評価】

#### ■学生への支援

挑戦的教育研究活動経費を向け、博士論文と異なる研究課題を支援している点も、大いに評価できる。

#### ■学生について

学生が自らランチ MTG を開催するなど自主性が出てきていること、インタビューでもおじけずに発言できることなど、頼もしさがある点は大いに評価できる。

#### ■プログラムについて

- ・従来の大学での人材教育は、研究者育成に偏っていたが、EMP では、アントレプレナーシップの涵養に向けたカリキュラムを改善し、Dr.はグローバル活動のスタートであることを明確にしている。
- ・プログラムは当初の計画通りさらにはその計画を超えた形で推進されており、少なくとも定められた評価基準に照らす限り、高く評価されている。推進担当者も真摯にプログラムに向き合っており、その労を多としたい。
- ・細目の評価項目を満たそうという努力は認められる。

### 【課題】

#### ■プログラムについて

- ・所与の評価基準を満足するだけでなく、さらに深い洞察のもとに大所高所にたった教育プログラムを目指してほしい。
- ・「情報システムに対して人が主体性を持つことが不可欠である」とする基本哲学は当然としても、機械によって人の機能をエンパワーすることが、果たして本当に人の主体性を高めることにつながるのだろうか。つながるとしたらそのための条件は何か。つながらないとすれば何に気をつけなければいけないのか。教員と学生が一体となってしっかり議論してほしい。
- ・根本的にエンパワーするという事がどのような意味を持つのかに立ち返った議論も必要と考える。
- ・「エンパワーメント情報学」の本質の深堀を行うこと。また、個々の多様性のある学生に対して、あまりに細目の進捗度で評価することで、個々人の創造性がつぶされないようにされたい。

以上のことから、筑波大学エンパワーメント情報学プログラムはおおむね順調に滑り出しているということができ、平成 28 年度実施の外部評価における総合評価は、

A（計画通りの取組である）と評価する。

### Ⅲ. 評価項目ごとの意見等

<p><b>(1) リーダーを養成する学位プログラムの確立</b></p>
<p>汎用力として、「分野横断力」は学生の中に、他学科の学生とも自然に交われるという意見がだされ、浸透している。「現場力」も一人当たり5名の教員が指導に割り当てられ、ものづくりを中心に浸透している。「魅せ方力」も学会に拘らず、イノベーション系の大会で受賞するなど確実に着実に浸透している。</p>
<p>昨年度に比べて、確実に学生が内外で客観的に高く評価された事例が増えてきている。これらの数が年々増えるのも大事かもしれないが、その質の向上、さらなる Scale-up していることがわかる仕組みが必要になるのかもしれない。</p>
<p>博士課程教育リーディングプログラムの制度のもとでの学位プログラムとしてしっかり整備されている。</p>
<p>指導体制を必要以上に整備することによって、逆に学生の主体性が損なわれないように配慮してほしい。</p>
<p>エンパワースタジオやエンパワー寮など設備面の環境は素晴らしい。そのもとで学生が切磋琢磨することを狙ったプログラムもよく整備されているが、ここでも学生の主体性が鍵となる。</p>
<p>本プログラムについての最大の懸念は、完璧な教育プログラムが学生にとって過度の負担となり、プログラムの枠を超えた学生の可能性の芽を摘んでしまうことである。そのようなことがないよう検証を絶やさないでほしい。</p>
<p>順調に活動されている。何人かの学生が非常に自主的に外に向かって活動している様子が見られ好ましかった。</p>
<p>努力が認められた。しかし、前回も述べたように、根本的にエンパワーするという事がどのような意味を持つのかに立ち返った議論も必要と考える。</p>
<p>活発な議論が一人の先生の枠を超えて議論されている。</p>
<p>非常に学生に対する負担も大きいプログラムであるが、つねに学生に対するケアも考えられるといいと思う。メンタルケアなどの考慮も必要だろう。</p>
<p><b>(2) 産学官民参画による修了者のグローバルリーダーとしての成長及び活躍の実現性</b></p>
<p>よほど思い入れのある研究室で研究している場合は別であるが、この段階で学生がキャリアパスについて実感がわく場合は少ない。逆に少ない方が大事ではないかと思う。多様なキャリアパスとは質の違う人々や企業とつきあえるチャンスがあることであり、その意味で今年の理解に比べて、来年度の学生の意識・理解がどう変わるかが大事ではないかと思う。</p>
<p>現段階でしっかりした体制をきめるよりも、修了者の具体的な事例を集めることで長期的な把握策を練ればよいと思う。本判定はもう少し時間をかけて、S や A が付く内容に高めていけばよいと思う。</p>
<p>平成28年度に修了予定である最終学年（5年次生）全員が企業（大企業）への就職を希望しているとのことであるが、これはキャリアデザイン教育の成功と考えていいのだろう。</p>

うか。博士課程教育リーディングプログラムは、産のみならず学官民における博士号取得者の活躍を促進することを目的としており、その観点での取り組みも期待したい。
コンテストでの受賞などの学生の活躍はこのプログラムの特徴と言えるが、逆にそれ自体が目標になってしまう危険性があることも注意してほしい。
良いプログラムの実行状況だと考える。しかし、学生によっては、個人の資質、進捗は大いに違うので、そのような多様性も含めた評価システムであって欲しい。
同窓会のような縦のつながりを意識して作るのは大事だと考える。是非、巣立つ学生が、このプログラムの卒業生であるというプライドを持てるようにして欲しい。

<b>(3) グローバルに活躍するリーダーを養成する指導体制の整備</b>
教員が既に築きあげてきたヒューマンネットをベースに学生のグローバル化を進められているように見える。学生がその枠を超えて、自らが考えて教員がカバーしてなかった分野まで進出していける事例がたくさん出てくると成功ではないかと思う。
全学的な教育改革のなかに本教育プログラムは位置づけられており、その意味で全学的な理念共有はできているものと推察される。

<b>(4) 優秀な学生の獲得</b>
「エンパワーメント情報学」について本質的な議論を展開してほしい。なにが新たな学問領域なのかの掘り下げが必要と考える。

<b>(5) 世界に通用する確かな学位の質保証システム</b>
がんじがらめの評価基準を多数、厳密に設定することよりも、これから通用するグローバルな視点から極めて明快に端的に評価する体制にも心がけて頂きたいと思う。
以前にも議論したが、項目別の達成度審査を過度にやると、学生の特徴的な良い点を伸ばせない可能性もあるだろう。そのような点も是非、取り入れて欲しい。学生に過度にこまめに達成度を満たす事を期待しなくていいのではないだろうか。
学位審査体制の構築には懸念があるが、質保証システムについてはきちんと取り込まれる努力が払われていると考える。

<b>(6) 事業の定着・発展</b>
大学として大学院の教育プログラムを全面的に学位プログラムに移行することの是非は別として、本プログラムについては支援終了後へ向けた取り組みは順調であるように思われる。

これらの意見、指摘事項は、今後事業の定着・発展に向けて、筑波大学側で継続的に検討の上、改善に向けての適切な対応がなされることを期待する。

平成 28 年 12 月

エンパワーメント情報学プログラム 外部評価委員会

委員長	原島 博
	岩野 和生
	鈴木 教洋
	土井 美和子
	萩田 紀博